浜松医科大学
国際交流後援会誌

第 16 号（令和２年 11 月発行）

ご挨拶

浜松医科大学国際交流後援会　理事長　**海野　直樹**

浜松医科大学国際交流後援会は「国際交流及びグローバル人材の育成」を支援する目的で設立されました。その事業として実施されました本後援会の令和元年度の活動実績をご報告いたします。まず外国人留学生への奨学事業として、令和元年度は私費外国人留学生 29 名に対し、留学生が勉学に専念できるよう合計 27,452 千円を奨学金として給付しました。海外の学術交流協定校からは韓国慶北大学校看護大学から４名、ポーランドのワルシャワ医科大学から４名、ルブリン医科大学から３名、中国の上海交通大学医学院から２名、その他、独デュッセルドルフ大学、フライブルク大学から各１名の交換留学生を受入れ、彼らに支援金を給付しました。令和２年度も引き続き、私費外国人留学生に奨学金を給付し、海外協定校からの交換留学生も受入れ、日本で安心して学習に打ち込めるよう支援を続ける予定でしたが、後述する新型コロナウイルス感染拡大のため交換留学生の受入れはできなくなっています。一方、本学学生の海外派遣事業としては、デュッセルドルフ大学他９大学へ計 16 名が海外留学し、医学科学生等 16 名の学生の海外留学等報告会を令和元年６月 28 日に実施しました。更に第 19 回慶北－浜松合同医学シンポジウムが令和元年６月４日韓国大邱の慶北大学校医科大学にて開催され、本学から 29 名が参加しました。また令和元年 10 月 30 日には米国ネブラスカ大学のゴールド学長以下５名が本学を訪れ、今野学長、山本理事等と懇談会及び研究施設の見学を行いました。これを契機として両大学の連携の可能性等について協議を重ね、本年６月にネブラスカ大学医療センターと本学が国際交流協定を締結いたしました。この他、令和元年度の支援事業として医学科１・３年、看護学科１・３年生を対象とした TOEIC 団体受験支援、留学生、学生、教職員の交流を目的とした English Café を開催いたしました。他にも国際化推進センターが中心となり、交換留学予定学生を対象とした、英語による患者プレゼンテーション訓練や、英語 PBL（Project-Based Learning）を実施いたしました。

これらの事業は学内・学外（団体・個人）の寄付金で成り立っており、令和元年度も多大のご寄付をいただき、この場をお借りして御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

さて、本事業は言うまでもなく、未来の医療を担う学生達が、若い時代に海外との交流を通じてグローバルな視点を育み、国際的に活躍できる医療人への成長をアシストする目的で行われております。このグローバルな交流を今後もいかに継続するか、2020 年世界は大きな試練を迎えております。2019 年末に中国武漢で始まった新型コロナウイルス（COVID-19）感染は瞬く間に世界中に広まり、今年予定されていた東京オリンピックも延期をやむなくされました。本原稿を執筆している 9 月 16 日現在、世界の感染者数は 2935 万人、死者も 93 万人となり、なおも急増中です。一旦は収束したかに見えた本邦での流行も再び第 2 波を迎えました。このような状況下で、社会は常に 3 密を避けることを求められ、テレワーク、テレビ会議、オンライン診療など、ヒトとの接触を極力避ける方策が次々と提唱されています。海外との交流に置いてもヒトの往来は現在ほとんど途絶え、いつになったら以前の状況にもどれるのかの目処も立っていません。中には新型コロナウイルス感染の根絶は不可能であり、これからは如何にして with コロナの社会を形成するかを目指す動きもあります。このような状況下、私たち国際交流後援会も新たな支援策を模索していかなければならないと考えています。残念ながら、現段階でこれはという具体策は提唱できません。しかしながら、新しい世界を構築するためにも、国際的視点を持った人材の育成は急務かつ切実であり、そのような人材がいなければ未来は拓けないと考えます。そのためには私たちは今後も努力を惜しみません。皆様方におかれましては、何卒ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

〈海外留学等報告会開催（令和元年６月 28 日）〉

〈理事会終了後の懇親会〉

〈国際交流後援会理事会（令和元年８月１日）〉

〈留学生ウェルカムイベントの開催（令和元年 10 月 24 日）〉

（研究報告会）

（懇親会）

桂林医学院訪問記

浜松医科大学　学長特別補佐　国際化促進担当　**福田　敦夫**

もう１年以上前になりますが、昨年の６月９日から12日にかけて私は国際交流協定を結ぶための事前視察として桂林医学院（Guilin Medical University）を訪問しました。桂林医学院は医学部、歯学部、薬学部、看護学部、実験医学部と大学院（３年制）からなり、３つの附属病院を有する医療系総合大学ですが、そこで留学生教育と国際交流担当の副学部長をしている教え子の魏兵くんから久しぶりに連絡を受けたからです。魏兵君は本学姉妹校の中国医科大学の卒業生で、神経生理学教室で私の院生として学び学位を取得しました。2008年に大学院修了後は瀋陽に戻り教育と研究に携わっていましたが、一昨年から桂林医学院の副学部長になっております。彼のミッションは現在450名の留学生をかかえる大学のさらなる国際化を進めることです。そこで私に連絡が来た次第なのですが、偶然にも私も本学の国際交流に係る身であったため、そこからトントン拍子に話が進み、まずは私が先方を訪問することになりました。広西壮（チワン）族自治区にある桂林といえば、秦の始皇帝が現存する霊渠運河を完成させたことから始まり、独特の切り立った山々を漓江から眺める絶景に魅せられて、古くから多くの画家や詩人が訪れて水墨画や詩にした有名な景勝地で、その景色は中国の紙幣の図案にも使われています。残念ながら今回は慌ただしい日程でしたので、その絶景の地に行くことはできませんでしたが、それでも町中の小高い丘に登ると独特の景色を垣間見ることができます（写真1）。桂林医学院では本部棟に熱烈歓迎の看板まで掲げていただき大変恐縮でした。張学長や学部長の方々とお互いの大学についての紹介と本学との交流に関して意見交換を行いました（写真２：会の終了後に張学長から記念品を受け取っているところ）。その後、国際医学部（International Education College）の留学生を対象に講演を行いましたが、数人の学生が質問にやってきて、なかなか意欲と学力が高い学生たちだと感心しました（写真３）。桂林医学院は郊外の臨桂（Lingui）にできた広大な新キャンパスに移転の最中であり、新キャンパスの教室や留学生宿舎、図書館（写真４：魏君と並んで）などの施設も視察しました。実験機器を集めたセンター（科学実験中心）では、私も本学の先進機器共用推進部の部長として、機器の共用には特に関心がありますので、いろいろ細かなことまで質問させていただきました（写真５）。交流が始まれば、本学には優秀な技術職員が多いので、学部・院生や教員にとどまらず、技術職員も積極的に交流することによって、先進機器共用部のさらなる発展につながるのではないかと思っています。滞在は実質３日間でしたが、施設見学だけではなく、魏君の多くの仲間達と昼食や夕食を共にできて、大変実のある交流ができました。帰国後にさっそく今野学長に報告し、学術交流協定を結ぶことになりました。当初は去年の12月に桂林医学院から張学長はじめ要職の方々６名が本学を訪れて調印式を行う予定でしたが、諸般の事情から４月に延期となりました。ところが、ご存知のようにコロナパンデミックの影響で４月の来訪は延期となり、現在もそのままの状態です。そんななか、日本でのマスクや医療物資不足のニュースに心を痛めた桂林医学院から、マスクと手袋が義援物資として本学に届けられました。今は、１日でも早く本学に来ていただいて、交流協定を結ぶ日が来ることを願っております。晴れて協定校となった暁には、是非また桂林を訪れて、今度は漓江下りにも行ってみたいと思っています。

〈写真１〉

〈写真２〉

〈写真３〉

〈写真４〉

〈写真５〉

浜松医科大学国際交流後援会役員等名簿

※敬称略　　（令和２年 10 月現在）

	氏　名	職　名　等
名誉理事長	小　林　隆　夫	浜松医療センター 名誉院長
名 誉 理 事	野　末　道　彦	浜松医科大学 名誉教授（**令和２年２月29日 ご逝去**）
〃	市　山　　新	浜松医科大学 名誉教授
〃	山　口　貴　司	山口ハート国際クリニック 院長

	氏　名	職　名　等
理　事　長	海　野　直　樹	浜松医療センター　院長　浜松医科大学特定教授
副 理 事 長	天　方　啓　二	天方産業株式会社　代表取締役
〃	滝　浪　　實	一般社団法人浜松市医師会　会長
理　　事	中　村　捷　二	株式会社サーラコーポレーション　相談役
〃	守　田　泰　男	遠州信用金庫　理事長
〃	岡　本　弘　美	国際ソロプチミスト浜松　会長
〃	野　﨑　都　世	浜松医科大学後援会　会長
〃	山　本　敏　博	社会福祉法人聖隷福祉事業団　理事長
〃	滝　浪　　實	浜松医科大学同窓会松門会　会長
〃	山　下　寛　奈	浜松医科大学看護学科同窓会　会長
〃	山　口　智　之	医療法人社団泰誠会大脇産婦人科医院　理事長
〃	小　出　幸　夫	医療法人社団一穂会西山ウエルケア　施設長
顧　　問	今　野　弘　之	浜松医科大学　学長
〃	山　本　清　二	浜松医科大学　理事（教育・産学連携担当）
〃	田　中　宏　和	浜松医科大学　理事（財務担当）・事務局長
〃	福　田　敦　夫	浜松医科大学　学長特別補佐（国際化促進担当）
〃	木　戸　芳　史	浜松医科大学　臨床看護学講座　教授
〃	才　津　浩　智	浜松医科大学　国際化推進センター長
〃	山　下　美　保	浜松医科大学　国際化推進センター特任講師

大久保忠訓名誉理事長のご逝去について

本後援会の大久保忠訓名誉理事長は、去る令和２年９月３日にご逝去されました。

大久保名誉理事長は長年にわたり、浜松医科大学国際交流後援会理事長としてご尽力されました。平成 14 年に初代理事長としてご就任いただき、浜松医科大学で安心して修学できるように外国人留学生の奨学金給付のための寄付金を募集するにあたり、自らが多くの方に寄付金募集に奔走され、寄付をいただいた篤志家の方には、手書きのお礼状を作成していただくなど、理事長として平成 23 年までの 10 年間にわたり、本後援会の運営に多大なご貢献をされました。

ここに故人のご功績を偲びまして、心からご冥福をお祈り申し上げます。

令和元年度 事業報告

■留学生支援事業

・博士課程大学院留学生への奨学金給付

私費外国人留学生 29 名に奨学金給付

国　名	人　数
中国	13 名
バングラデシュ	9 名
ベトナム	5 名
インド	1 名
ルワンダ	1 名
計	29 名

・協定校からの学生の受け入れ支援

協定校等からの短期交換留学生（特別聴講学生）15 名に受け入れ支援金給付

留学先	国　名	人　数
フライブルク大学	ドイツ	1 名
慶北大学校看護大学	韓国	4 名
ワルシャワ医科大学	ポーランド	4 名
ルブリン医科大学	ポーランド	3 名
上海交通大学医学院	中国	2 名
デュッセルドルフ大学	ドイツ	1 名
計		15 名

・外国人留学生実地研修旅行実施　（令和元年 10 月 31 日～ 11 月 1 日）

行先：山梨・長野県

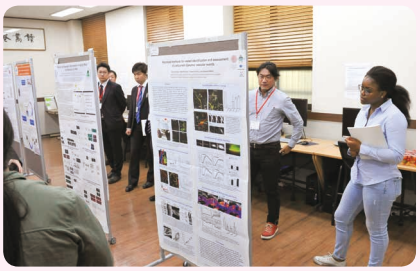
１日目　世界遺産「富士山」めぐりと上諏訪温泉
（忍野八海、河口湖、鳴沢氷穴、富岳風穴）

２日目　時計のふるさと「諏訪」

参加者　外国人留学生、外国人研究者、教職員　17 名

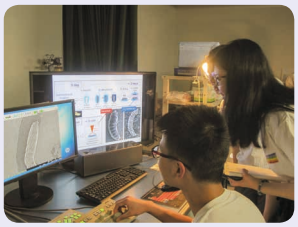
■国際交流事業

・第 19 回 慶北－浜松合同医学シンポジウム開催（令和元年 6 月 4 日慶北大学校医科大学）
浜松医科大学より 29 名が慶北大学校医科大学を訪問



・浙江大学学生訪問（令和元年 7 月 10 日）
浙江大学（中国）から学生 16 名、引率教員 1 名が浜松医科大学を訪問

＜イノベーション光医学研究室見学＞


＜ナノスーツ開発研究部見学＞

・さくらサイエンスプランの開催
（令和元年 10 月 28 日）インドネシア国から理系を専攻する高校生 8 名、引率者 1 名が浜松医科大学研究施設等を見学

＜麻酔・蘇生学研究室見学＞

＜細胞分子解剖学研究室見学＞

・ネブラスカ大学学長訪問
（令和元年 10 月 30 日）ネブラスカ大学（米国）から学長含む 5 名が浜松医科大学を訪問

＜懇談会後の記念撮影＞

＜ナノスーツ開発研究部＞

・留学生ウェルカムイベントの開催
（令和元年 10 月 24 日）前半に研究発表（大学院留学生 3 年生 6 名）、後半に懇親会の実施

＜大学院留学生 3 年生による研究発表＞

＜研究発表後の懇親会＞

・国際交流のつどい
（令和 2 年 3 月 2 日開催予定⇒新型コロナウイルス感染拡大のため開催中止）
留学生、教職員、国際交流後援者及び地域関係者との交流・交歓を図り、日ごろの支援に対する感謝の意を表すイベント

・Journal Club（令和元年 12 月 16 日）
光創起イノベーション研究拠点が開催、外国人研究者の指導を受けながら、静岡大学・浜松医科大学の学生が英語論文を読解し、発表するセミナー
浜松医科大学からは医学科 2 年生 2 名が発表

■グローバル人材育成事業・博士課程大学院留学生への奨学金給付

・協定校等への学生の海外留学支援（海外留学支度金の給付）

留学内容	留学先	国　名	人　数
臨床実習	デュッセルドルフ大学	ドイツ	1名
	ルブリン医科大学	ポーランド	2名
	ワルシャワ医科大学	ポーランド	3名
	ビャウィストク医科大学	ポーランド	1名
	ミシガン大学	米　国	1名
	ハワイ大学	米　国	2名
	上海交通大学医学院	中　国	2名
	トリノ大学	イタリア	1名
	マルタ大学	マルタ	1名
夏季ワークショップ	ハワイ大学	米　国	2名
計			16名

・医学科１・３年生、看護学科１・３年生　TOEIC 団体受験支援
受験費用は大学基金より支出

・留学生、学生、教職員との English Café 開催（令和元年５月～令和２年１月、計８回実施）
お昼休憩を利用して、留学生、学生、教職員が国際交流を行った　参加人数延べ 119 名

・英語患者プレゼンテーション訓練の実施
交換留学予定学生を対象とした、英語による患者プレゼンテーション訓練の実施

・英語 PBL の実施
英語での倫理的思考能力の向上を目指し、国際性に富んだ医療人を養成するための「問題解決型学習」。症例シナリオを基に有志学生が課題解決に取り組む

・テクニカルターム・リストの作成
学生が学習すべき医学英語単語集を各担当教員の協力の元作成中

中国のみなさんからマスク寄贈を受けました

令和２年５月 11 日（月）に中国の桂林医学院から本学へ新型コロナウイルス感染拡大防止のための医療用マスク等の寄贈を受けました。桂林医学院 Zhang Zhiyong 学長は、令和２年４月 22 日～ 23 日に国際交流協定締結のために本学を訪問予定でしたが、新型コロナウイルスの世界的感染拡大により、訪問予定日の再調整を余儀なくされました。その後、４月初めに桂林医学院から本学へ、医療用マスク等を寄贈したい旨の温かい申し出があり、医療用マスク 1,000 枚及びディスポーサブル手袋 600 枚が寄贈されました。

また、同日に、かつて浜松医科大学に留学して卒業された姉妹協定校である中国医科大学の 11 名の有志一同様から、医療用マスク 2,600 枚（N95 マスク 1,000 枚、サージカルマスク 1,600 枚）の寄贈を受けました。今回ご支援いただいた卒業生有志 11 名の皆様は、1990 年から 2009 年に中国医科大学から本学大学院に留学され、現在は中国医科大学附属病院（附属第一医院）で活躍されています。今回、新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るっている中で日本の母校、当時の恩師や友人たちは大丈夫だろうかと心配されて寄贈されたもので、医療用マスクと共に温かい励ましのお手紙も添えられていました。

（左から、才津国際化推進センター長、福田学長特別補佐（国際化促進担当）、今野学長、山本理事（教育・産学連携担当）・副学長）

＜桂林医学院より＞

＜中国医科大学有志一同より＞

学術交流協定校紹介

浜松医科大学は、20 大学 10 カ国と大学間交流協定を結んでいます。(2020 年 10 月現在)
今回はイタリアのフィレンツェ大学を紹介します。

フィレンツェ大学の起源は、かつてのフィレンツェ共和国によって高等教育機関として設立された 1321 年にまで遡ります。1924 年に大学として正式に国から認められました。
今日では、強い国際的な繋がりをもったイタリアの重要な国立大学の一つとなっており、文化的で科学的な国際性を促進させるため、世界中の施設と学術や研究の協定を取り交わし、外国人職員、研究者、留学生を迎え入れています。

フィレンツェ大学には 10 の専攻 (School)、200 以上の課程 (Program) があります。約 51,000 人の学生が在籍し、学生の 1/4 は大学のあるトスカーナ州外から来ています。留学生は約 3,400 人在籍し、75 ヶ国と約 300 もの協定を締結しています。

本学は 2017 年 11 月 24 日にフィレンツェ大学生物学部と協定を締結し、2019 年 10 月 15 日に協定対象学部を、臨床生物医科学部、臨床医学部、健康科学部へと拡大締結しました。

留学生、臨床実習生の言葉

＜大阪、USJ にて＞

留学生より

大学院医学系研究科博士課程４年
細胞分子解剖学講座
Ariful Islam

私はバングラデシュ出身のアリフル　イスラムと申します。教育の都市として知られる、ラジシャヒで生まれ育ちました。世界で知られるとても有名な都市であり、シルクとマンゴーの都市としても知られています。私はラジシャヒ大学の生化学・分子生物学部を卒業しています。私の趣味はクリケットをすること、ガーデニング、旅行、そして魚釣りです。2017 年に大学を卒業後結婚しました。私の妻の名前はモストナオシア　タスニンといい、彼女も静岡大学の博士課程学生です。

私はラジシャヒ大学の生化学・分子生物学部での修士課程の間に自身の研究を始めました。当時、日本の教育システム、研究施設、文化、生活様式、自然美についてたくさん話を聞きました。その時から、私は日本で博士課程を学ぶことにとても興味がありました。幸いにも、修士号を得た直後、2017 年に私の夢を実現させる機会を得ることができ、博士課程学生として、浜松医科大学の細胞分子解剖学講座に入りました。私は現在博士課程学生の４年生です。現在いくつかの研究プロジェクトに取り組んでおり、博士課程中に第一著者として２つの研究論文、共著者として別に２つの研究論文をすでに発表しています。現在のプロジェクトを達成し、第一著者として更なる論文を発表するために一生懸命取り組んでいます。博士課程を修了した後は、博士研究員として引き続き日本で研究を続けたいと思います。

私は 2017 年 11 月に渡日し、到着した初日から日本の文化、言語について学ぼうと努力し、日本の自然美を探求しようとしました。今私は日本語でコミュニケーションをとることができるため、生活がより楽になりました。既に東京、横浜、茨城、大阪、京都、奈良、名古屋、富山、立山、金沢、長野、岐阜、山梨、白馬、諏訪、伊豆、静岡等の有名な場所を訪れました。次は北海道、沖縄、長崎を訪れる予定です。

私は授業料免除をしていただき、博士課程を始める機会を与えてくれた浜松医科大学にとても感謝しています。また、日本での生活費を維持するために奨学金を供給してくださっている全ての後援者の皆さんにも心から感謝しています。そして私を博士課程学生として受け入れてくださった瀬藤光利教授にも深く御礼申し上げます。

＜奈良公園にて＞

協定校の交換留学生より

氏　名　Till Frentzel

在籍大学　デュッセルドルフ大学（ドイツ）

受入講座　第三内科（令和2年2月 17 日～ 28 日）
第一内科（令和2年3月2日～ 13 日）

1．奨学金受給期間中の学習についての報告

私の浜松での滞在は全体的に楽しいもので、日本の生活様式について知ることができ、同時に医療知識も大幅に増えました。様々な病気、異なる薬、先生の患者さんとの接し方も全てが違い、非常に日本的でした。

講習は最新のものでそのトピックについて明確な理解を与えるものでした。

2．日本と浜松医科大学についての印象

病院は近代的で、私は常に歓迎されていると感じていました。日本語ができない私のために、先生方はいつも入院患者の症状を私が理解しているか確認する努力をしてくださいました。アテンドの学生も、言葉の壁を乗り越えて、どのような行動・態度をすればよいかを常に説明してくれ、それは日本の生活様式を理解するのにとても役立ちました。

氏　名　Ren Anran

在籍大学　上海交通大学（中国）

受入講座　第二外科（令和元年 11 月 25 日～ 12 月6日）
第一外科（令和元年 12 月9日～ 20 日）

1．奨学金受給期間中の学習についての報告

浜松医科大学では、第一外科と第二外科で楽しく学ぶことができました。中国ではそれぞれの科が分かれていて色々な手術を見るチャンスがありません。しかしここでは、沢山の手術を見ることができました。

手術を見ている時は、私がその手術を理解できるように、先生方や学生の皆さんが手術について説明してくださいました。ダビンチ手術は大変すばらしいです。手術見学の後は、学生が必ず何かを学べるようにするため、先生方はいつも学生に課題や宿題を出します。朝のカンファレンスでも、みんなで一緒になって患者さんの状況や手術計画について議論し、とても専門的でした。ここでの実習経験は、独特で楽しいものでした。この機会を頂けて光栄です。

2．日本と浜松医科大学についての印象

浜松は静かな所です。

浜松医科大学は、清潔で整理整頓が行き届いているだけでなく、先生方、患者さん、研修医を含め皆さんが、とても礼儀正しく思いやりがあります。ここでの滞在は素晴らしい経験になりました。

過去卒業留学生の現況

中国　桂林医学院
国際教育学部長 / 国際協力交流室長
魏　兵 (Wei Bing)

平成 16 年（2004 年）に、浜松医科大学生理学の福田敦夫教授のご指導の下、博士課程学生としての勉強・研究を始めるために、私は中国の瀋陽市（以前は奉天市と呼ばれていました）から日本の名古屋空港まで飛び、浜松へ向かいました。日本に到着してすぐ感動したことは、清潔で静かな環境と温かい笑顔、そして秩序がありゆずりあい精神のある交通網です。

海外に出るまで日本語は勉強しておらず、英語も慣れていませんでした。なぜなら最後の学校を卒業後何年も経過していたからです。そのため言語の隔たりは多大な苛立ちとなりました。語学力不足によって引き起こされた教育長官（指導者）とのコミュニケーションの失敗は、あまりに辛く恥ずかしいことだったので、私は日本語を学び、日本の文化を理解しようと決意しました。大学から留学生に提供される日本語補講のおかげで、私にとって最も大変であった言語の問題に打ち勝つことができました。

私の指導教員である福田教授は有名な神経生理学者で科学研究や生徒には厳しい方です。彼の指導は私の研究を非常に援助してくださいました。私は円滑に光先端医学専攻における博士号を取得し、第一著者として「Neuroscience」へ論文を発表し、全ての研究を終えた後、平成 20 年（2008 年）の 3 月に中国へ戻りました。日本での博士課程取得のための研究経験と、英語・日本語力のおかげで北京のインターナショナル SOS にて働く機会を得ることができました。そこで数年間、異なる国・文化の人々と接することで国際的視野が広がりました。

私のことを援助し、気にかけ、指導してくださった先生方、そして親切であった人々のことをよく思い出します。私は人生の中でとても素晴らしい 4 年間を日本で過ごしました。この経験が私の人生を変え、浜松市は私の第二の故郷になりました。その後、仕事や家族旅行のために数回日本を訪れましたが、スケジュールが詰まっていたため、知人に会いに大学を訪れることができなかったことは非常に残念でした。

2019 年（令和元年）に、美しい景観で世界的に有名な桂林市にある、桂林医科大学の国際教育学部長、そして国際協力交流室長に着任しました。私の任務は、より多くの留学生を受け入れ、多くの海外の方に大学を知ってもらい、国際教育をより効果的に発展させるために、多くの他大学と教育、科学研究、交換留学等において協力体制を確立していくことです。このような使命を持つ私と、現在国際化促進担当の学長特別補佐である福田教授は、浜松医科大学と桂林医科大学の大学間交流を促進させ、日本と中国間の相互理解と学習を円滑にしていくことができるでしょう。

日本と中国は同じ困難と試練に立ち向かっている隣国です。今年初めに発生した新型コロナウイルスは私たち両大学が予定していた交流を遅らせましたが、逆に、私達がお互いに気遣い、一緒に頑張っている誠実さを、目の当たりにすることができました。平成から令和へ、浜松から桂林へ。私は浜松城公園で咲いていた桜を忘れることはできません。そして皆さんが桂林へキンモクセイの香りを嗅ぎに来られることを願っています。

海外臨床実習報告書（2020年）

医学部医学科6年　張　択合

この度、アメリカのUniversity of Chicago Hospitals の Pulmonary Consultation Service と、医学教育振興財団（JMEF）の「英国大学医学部における臨床実習のための短期留学」プログラムを通じ、Oxford大学医学部のJohn Radcliffe HospitalのDepartment of Infectious Diseasesにて、臨床実習させていただきました。

【シカゴ大学（2月1日～2月29日）】

実習は主にCenter for Care and Discovery（CCD）とMitchell Hospitalで行いました。毎朝8時頃に病院に到着して、カルテを読み、担当患者に会った後、9時からFellowのMorning Reportに参加し、PulmonaryとMedical Intensive Care Unit（MICU）から一症例ずつFellowが発表していました。発表は、患者の簡単な現病歴と検査結果を担当Fellowが説明し、もうひとりのFellowが与えられた情報、胸部X線やCT画像を読影し、AssessmentとPlanを提案するという流れでした。FellowのMorning Report後は、チームと一緒に当科が担当する患者さんの治療経過、方針を見直して、新患の割当などをして、その後また病棟に戻り、患者さんの診察や病歴聴取を行いました。11:30から1時間はResident Morning Reportがあり、Chief ResidentとAttendingがPBL形式で症例から疾患発表しResidentとDiscussionしながら疾患を学ぶというDiscussion形式のアメリカらしいMeetingがあり、医学生も参加することもありました。午後の回診はFellowの都合に合わせて、AttendingやResidentは行動するので、SMSで連絡を取りながら時間を調整して、大体13時から14時頃の間から回診し始めて、症例数が少ないときは帰りが16時のこともあれば、19時のこともありました。回診時に患者と主に話すのはFellowとAttendingで診断、治療方法、今後の方針を丁寧に15から30分かけて説明することが多い印象でした。患者だけではなく、患者の生活環境や家族を配慮して治療方針を変えることもありました。

＜シカゴ大学呼吸器内科チーム＞

【オックスフォード大学（3月1日～16日）】

実習は、John Radcliffe HospitalのJohn Warin Ward（JWW）という感染症科の病棟で行いました。当時入院中の症例は不明熱、ヒアリに刺された患者さん、心内膜炎からの菌血症など様々でした。毎週月曜日の朝はHandover meetingがあり、患者さんの一週間の経過または週末入院された新患者の情報共有後、回診をConsultantと一緒に行いました。

病棟以外にChronic Fatigue Syndrome（慢性疲労症候群）等の外来がありました。血液検査で自己免疫疾患を除外した後、30分以上かけて問診を聴取することもありました。患者さんが慢性疲労症候群によって長年苦しんできた

ことを語っている内に涙ぐむことも多くて、自分たちの苦しみを受け入れる医師がいることに感激する場面もありました。

【COVID-19 感染拡大中の実習】

オックスフォード大学の実習初期において市内では COVID-19 の症例はなかったものの、NHS（National Health Service）はCOVID-19に関する問合せ専用ダイヤルを設け、専門家のコンサルが必要な場合は直接感染症内科にある「COVID Phone」につながる仕組みになっていました。しかし、John Radcliffe Hospital は High consequence infectious diseases（HCID）treatment centre ではないため、感染疑いの患者を他の患者や医療従事者に接触することなく病棟までに搬送するルートがなく、初期段階では試行錯誤で混乱するシーンもありました。混乱の中でも学ぶことは多くて、前代未聞のパンデミックに関して、今後どのように受け入れるか、スタッフの専門職問わず、毎日のように議論することになりました。本来なら 4 週間の実習期間の予定でしたが、COVID-19 の感染拡大に伴い、実習が残念ながら 2 週間で中止になりました。しかし、幸いなことに帰国便を変更できて、実習中止 3 日後に無事日本に帰国することができました。

＜オックスフォード大学 COVID-19 に関する議論＞

最後に、応募から派遣までサポートしてくださった先生方々、ご支援いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。引き続き新型コロナ問題が一日も早く収束に向かうことを祈念いたします。

国際化推進センター、ダイバーシティスペース及び授乳室の紹介

国際化推進センター、ダイバーシティスペース及び授乳室を福利施設棟２階に設置しました。構内のグローバルエリアの確立、専任教員と事務部門が同室になることで国際化推進の強化を目的としています。

ダイバーシティスペースは、留学生等との国際交流の促進を図るため、この部屋での会話は英語のみとした交流スペースとし、礼拝にも使用可能な多様性のある空間作りを目指しました。授乳室と併せて本学の留学生、学生、外国人研究者、教職員はどなたでも利用が可能なスペースとなっています。

＜ダイバーシティスペース＞

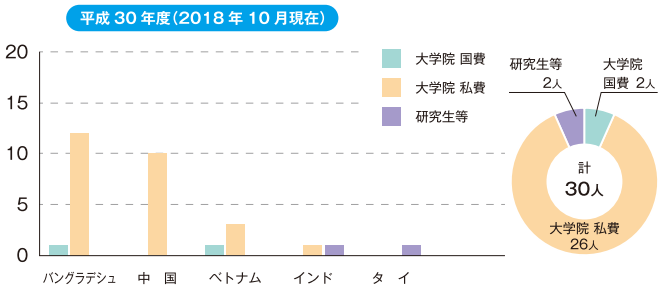
＜授 乳 室＞

国際交流概況

外国人留学生数

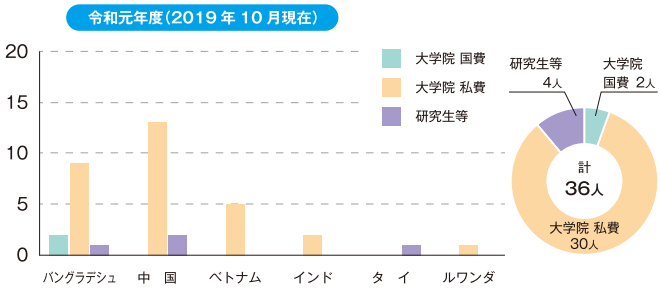
■平成 30 年度（2018 年 10 月現在）

国　名	大学院		研究生等	計
	国　費	私　費		
バングラデシュ	1	12		13
中　国		10		10
ベトナム	1	3		4
インド		1	1	2
タ　イ			1	1
計	2	26	2	30



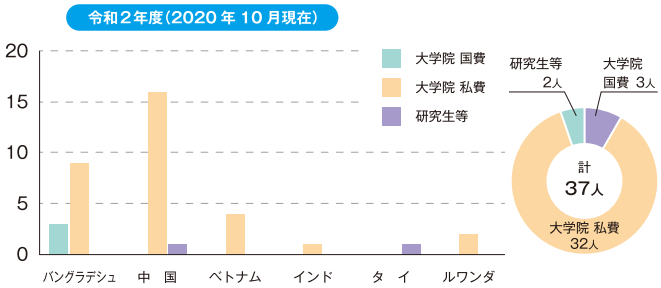
■令和元年度（2019 年 10 月現在）

国　名	大学院		研究生等	計
	国　費	私　費		
バングラデシュ	2	9	1	12
中　国		13	2	15
ベトナム		5		5
インド		2		2
タ　イ			1	1
ルワンダ		1		1
計	2	30	4	36



■令和２年度（2020 年 10 月現在）

国　名	大学院		研究生等	計
	国　費	私　費		
バングラデシュ	3	9		12
中　国		16	1	17
ベトナム		4		4
インド		1		1
タ　イ			1	1
ルワンダ		2		2
計	3	32	2	37



協定校等からの交換留学生

国名	H30 年度	R 元年度	R ２年度
ブルガリア		1	
カナダ	1		
中　国	2	2	
クロアチア		1	
フィンランド	1		
フランス	1		
ドイツ		2	
インドネシア	1	1	
イタリア	1		
マルタ			
ノルウェー	1		
オマーン	1		
ポーランド	5	8	
韓　国	1	4	
ロシア		1	
スウェーデン		1	
スイス	1		
タ　イ		6	
イギリス			
アメリカ			
合　計	16	27	0

協定校等への交換留学生

国名	H30 年度	R 元年度	R ２年度
ブルガリア			
カナダ			
中　国	1	2	
クロアチア			
フィンランド	1		
フランス			
ドイツ *1	4	1	
インドネシア			
イタリア		1	
マルタ		1	
ノルウェー			
オマーン			
ポーランド	7	6	
韓　国	4		
ロシア			
スウェーデン			
スイス			
タ　イ			
イギリス *2	1	2	1
アメリカ *3	2	5	2
合計	20	18	3

*1　協定校での語学留学も含む
*2　イギリス留学者は、医学教育振興財団からの支援
*3　サマーワークショップも含む
（注）語学留学、サマーワークショップは実施年度、
　　それ以外の留学は単位認定した年度で計上した